

相模原台地北西部及びその周辺の地誌

西村道子

フィールドとして相模原を選んだのは、台地、河岸段丘、それにこれらを刻む相模川など、地形的興味を感じたからである。相模原台地に関する既存の研究記録は相当数多いが、それらは概ね台地の中部から南部にかけてのもので、台地の北西端部とそれに接する段丘面についての記述は殆んどない。そこでこの殆んど手をつけられていない地域を調査してみることにした。

調査の結果をまとめると次のとおりである。

1. この地域では、台地面は大きく三段に分けられ、さらに細分される。台地周辺の河岸段丘面は、台地のそれぞれの面に対比される。
2. 地下水位標高は、概ね地形の傾きに沿っており、台地では水形的には孤立している。地下水面位の深さは段により異なり、ローム層の厚さに関係がある。また帯水層の厚さは同じ段でも著しく異なることがある。
3. ロームの厚さや性質は、台地の上段から下段へ、あるいは北西から南東方向へ次第に変化していく。
4. 初期の集落や開拓の歴史は、谷や地下水など水に大きく影響されている。
5. 自然条件から水田は僅かに谷や氾濫原にみられるのみで、ロームの厚く堆積した台地面は桑園として活路をみ出した。
6. しかし、自然の障害を克服して、畑地灌漑が着々と行われつつある。
7. 畑作に甘藷が多いため、養豚が導入され、また位置的に多くの市場を控えることから、最近では養鶏、蔬菜、酪農なども広く行われている。
8. 台地面はまた、戦時中の軍部計画および戦後の接收により、都市化が著しく推進された。この影響は現在の都市の性格を多くの面で決定している。
9. 軍事関係の解放地は、農地とされず、工場が誘置された。特に農耕地に不適当な上段橋本地区では、農地の潰壊が激しい。
10. しかし、中段大沢地区では依然として農耕地面積が大部分を占めている。
11. 城山地区は、山地が大部分を占め、農耕以外の商品経済が滲透し、八王子と桑園地帯とを結ぶ商品流通路としての「市」が繁栄していたが、最近相模川河水統制事業の一端をなすダムが計画され、横浜、東京へまで影響を及ぼすことになり、その役割が注目されている。